カトリック 仙舎数区報

No.238 2019年8月4日 発 行 カトリック仙台司教区 〒980-0014

仙台市青葉区本町 1-2-12 Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378 発行責任 広報委員会 URL http://sendai.catholic.jp/

聖香油ミサ ― 仙台教区民の一致を求めて



聖週間の水曜日、4月17日午後1時30分から、仙台教区カテドラルで、聖香油ミサが行われました。このミサは、神の民として仙台教区の教会に呼び集められた司教、司祭、信徒、修道者の一致を表しているもので、平賀徹夫司教、幸田和生司教、仙台教区内で宣教司牧に当たる司祭28名が参列し、心を合わせて、共同司式のミサを捧げました。

聖香油ミサは、各教区で司教を中心とする共同ミサとして、1年に1回だけ捧げられるもので、香油

の聖別とともに、司祭職の制定の記念が行われます。

ことばの典礼の後、高木健太郎神学生の司祭志願者への認定式が荘厳に行われました。志願者である高木神学生は、叙階を受けるための教育を受けること、自分を鍛えることを問われ、「望みます」とはっきり、宣言しました。

続いて、司祭団は、司教と信徒の前で、各自が叙階されたとき、司祭として一生を神と人への奉仕のために捧げると約束をかわした「司祭の約束」を声を合わせて、はっきりと更新しました。

その後、秘跡の執行に欠かせない3種類の油、病者の塗油に使用する油、洗礼志願者の油、そして香油の祝福・聖別が行われました。奉献文が唱えられた後、病者の塗油用の油が祝別されました。他の2つの油は、聖体拝領後、洗礼志願者の油が祝別され、最後に堅信の秘跡に用いられたり叙階の秘跡に用いられる香油が、聖別されました。

ミサは水曜日の日中ということで参加者が少ないのではないかと心配したのですが、四ツ家教会はレンタカーのバスで参加し、弘前教会の方も団体で参加されました。福島各地の教会の信者、宮城県内の信者、約200人以上の信者が集まり、祈りを捧げました。



各地区からのお便り

第8地区より

く アレルヤ音楽祭 >

郡山教会で6月2日、日曜のミサ後、「アレルヤ音楽祭」を行いました。

「アレルヤ音楽祭」とは、郡山教会の教会コンサートで、今年は子どもの貧困対策活動への支援献金を呼びかけました。







出演者は、ザベリオ学園小学校聖歌隊、フィリピンの信徒、ベトナムの信徒、ソプラノ独唱、チェロ演奏、郡山教会聖歌隊と多彩でした。フィリピンの信徒たちは東日本大震災の被災地の映像を映しながら「スティル still」を歌い、ベトナムの女性信徒はアオザイ姿を披露しました。演奏に加えて、民話と宮沢賢治の詩の朗読がありました。コンサートの最後は出演者と会場の皆さんで「アーメン ハレルヤ」を合唱しました。 小湊 博子(郡山教会)

第7地区より

< 初聖体式 >

野田町教会で5月19日(日)に行われた「野田町・松木町教会 合同典礼」で、初聖体式が行われました。この日初聖体を受けたのは野田町教会5人、松木町教会2人の子どもたち。女の子は白いドレスを着てベールをかぶり、男の子はアルバを着て、とても立派にこの日を迎えました。7人は初めてのご聖体のお恵みをいただく瞬間まで、緊張と神妙な面持ちでミサにあずかっていました。拝領前になると子どもたちは祭壇を囲み、エメ神父を中心にして互いに手をつなぎ、心を合わせて主の祈りを唱え、ご聖体をいただきました。





初聖体を迎える準備はコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の Sr.安田が中心になって大変熱心に行ってくださいました。このことには大変感謝しています。また6回の勉強会では若い親御さんたちも、ミサの前の勉強会へお子さんを参加させるために熱心に協力し、子どもたちへ信仰をつなぎ伝えました。親御さんたちにも感謝です。

初聖体式を終えた子どもたちは、もう笑顔、笑顔。 お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃん、みんな満面の笑顔で記念撮影。聖堂の中が笑顔とカメラのフラッシュでにぎわいました。その後は場所を信徒会館に移し、ケーキでお祝いしました。初聖体おめでとう。この日の笑顔がこの先もずっと7人の子どもたちにありますように、とお祈りした一日でした。 渡邉 祐子(野田町教会)

第5地区より

< 『第5地区通信』を通じて 共に宣教の輪を広げよう! >

第5地区は古川、石巻、北仙台、東仙台、西仙台、塩釜の6小教区で構成されています。



地区制スタートと同時に地区の機関紙として『第5地区通信』を発行しました。目的は互いの小教区の活動を知り情報を共有することで、より互いを知り、宣教の輪を広げていくことです。最新版5月号は、ご復活を迎えた喜びの記事であられています。

特に目を引いたのは、石巻教会に所属するベトナム・フィリピン人の若者たちの姿です。希望の光を感じました。彼らは仕事のために来日しました。日曜日はミサにあずかり美しい声が聖堂に響き心が洗われます。

言葉の壁はありますが信仰に結ばれた心は通じあえます。各小教区においても海外から来られた信徒の方々が多数おられます。私たちは積極的に交わり身近なところから宣教の輪を広げて行きましょう、アレルヤ! 岩崎 千秋(北仙台教会)

第1地区より

く合同ミサン

6月16日(日)本町教会で第1地区合同ミサが行われ、その中で堅信式が行われました。合同ミサは毎年父の日に弘前地区と青森地区とで交互に行っており、今年は弘前教会の予定でした。また、堅信式は4月28日(日)本町教会にて行われる予定でしたが、司教の体調不良により、日程を変更して行われました。





ミサには 177 人参加し、主司式は平賀徹夫司教。カンデラリア・レネ神父、メヒア・タデオ・ラファエル神父と共に捧げました。当日堅信の秘跡を受けたのは本町教会 4 人、浪打教会 5 人、弘前教会 2 人、また 1 人の洗礼式も行われました。ミサの中では主の祈りをタガログ語で歌い、ミサの後の分かち合いでは受堅者へ堅信証明書と記念品が贈られ、平賀司教へは感謝とお礼が、レネ神父とラファエル神父へは父の日のプレゼントが贈られました。各教会の教会委員長からそれぞれの近況報告、各自持ち寄ったおにぎりと本町教会女性部の作った豚汁で昼食。最後は聖歌「ひとつになろう」を歌い、終わりの祈りと司教からの祝福を受け終わりました。

く 新しいエレクトーン >



黒石教会に新しいエレクトーンがやってきました。 今まで使用していたオルガンは、30数年前に信者 が寄贈してくださったものですが、強弱のペダルの 故障やある一定の音が弱くなったり、出なくなった りなどの不具合が生じており、新しい部品の入手も 困難で修理ができずにいましたので、念願のエレク トーンに皆が大変喜んでいます。

購入にあたっては、信徒会費の積み立てやご寄付等、中には匿名でのご寄付もあり、本当に皆の気持ちが形になったエレクトーンだと感じています。6

月2日(日)のミサ後、ラファエル神父に祝福していただき、ご寄付いただいた皆さまに感謝するとともに、これから先、長く使えるよう願い、祈りました。 長谷川 晶子(黒石教会)

〈特集〉

被災地の今 2

石巻より

一度は捨てたもの

思いがけず被災者と呼ばれるようになり、8年が 過ぎた。長いとも短いとも言えない年月だが、環境 の激変についていくのが精いっぱいで、心の整理は いまだにできていないというのが正直なところであ る。

というのも、私は多少の経験から、自分はいささか強いような気がしていた。だが、それは大変な思い上がりであった。現実は驚くほど弱く、情けない人間なのだと思い知ったのが震災であった。私は自分を見つめ直さねばならなかった。移転先での暮らしの立て直しとともに、これは思いのほか骨の折れることでもあった。

津波が引いた後、破壊された街を歩き、人々の無 残な最期を見つめ、ガレキと化した我が家の前に立った時、私の胸に浮かんだのは「神も仏もない」こ のひと言だった。

その方は、いつも人を助けてくださるはずだった。 光であり希望だと聞いていたのに、私は見放された のか? 何がいけなかった? なぜ生き残ったのか? 不安と疑問は鉛のように頭に重くのしかかってい た。

喪失感と悲しみにさいなまれ、希望も持てない避 難暮らしに病気になることもあった。

絶望の沼に投げ込まれた私は襲ってくる虚無感の 末に、その方を頼るのもやめた。とても信じられないのだ。ものを食べてさえいれば生きてはいける。 そんな人は大勢いる。それでいい、何もいらない。 生き方など考えないほうが楽ではないのか。

混沌とした日々の中で、当座の仮住まいであるア パートが見つかった。そこは皮肉にも教会へは徒歩 で行けるという近さだった。が、もう縁遠いのだと 内心、思っていたのでさほどのうれしさはなかった。 でも、泣ける部屋があるというのはとてもありがた いものだった。

そんな中、ある朝、突然、教会に行きたい気持ちを抑えることができずに、私は靴を履いた。理由は今でもわからない。ただ人に会いたくて、何かを探したかった。教会へ行けばそれができる。そして、やはり教会も人も温かかった。でも、探しものは見





つからなかった。

それから数か月あとのミサのことだった。その日の閉祭の歌は典礼聖歌 390 番である。いつものようになんとなく歌い始めた。「キリストのように考え、キリストのように話し、キリストのように行い、キリストのように愛そう」。ここまできて、次に差しかかったとき、一瞬、のどが詰まって声が出なくなった。「もはやこの身に生きることなく、キリストによって生きるために…」。涙があふれて仕方がなかった。今までに何度も歌っているのに、言葉が心にしみていなかった。聴いても胸に響いていなかったのだ。歌の区切りは震災の前と後の自分のように思えて仕方がない。そうだ、少しでもみたされた日々を過ごそう。生きていることに感謝しよう。私は、やっと指針となる言葉に出会うことができたのだ。

あの日、泥まみれの道ばたに捨ててきたものを、 恐る恐る拾いあげている自分がいた。いや、拾われ たのだろう。その方は、砂粒よりも小さな私を見つ けてくださった。勝手にそう思っています。

佐藤 幸子(石巻教会)

教区の諸活動

震災によって「壁」は崩れ、新しい交流が生まれる 8年目の3.11

8年目の3.11 は、朝から激しい雨が降っていました。

この日は月曜日、その上にこの雨。何人の方が、 仙台教区主催の「東日本大震災犠牲者追悼・復興祈願ミサ〜ともに復興をめざして〜」に参加してくださるのかと、少し心配しましたが、160人 余の方が参加してくださいました。

主司式は、平賀徹夫司教、大阪教区の神田裕神父、 松村繁彦神父、仙台教区で宣教司牧に当たっている 森田直樹神父、イ・ソク神父、川崎忠紀神父、佐々 木博神父、ファミニアラガオ・フェルディマール神 父、小野寺洋一神父が共にミサを捧げました。

司祭たちが入堂した後、パイプオルガンが静かに流れ、2時46分の弔鐘とともに、黙祷を捧げました。

それからミサが始まりましたが、平賀司教はまず



「東日本大震災から8年を迎えるにあたり、思いを同じくするすべての人と心を合わせて、犠牲となった方々をしのび、慰めと希望、そして復興に向けての知恵と勇気を求めて、この感謝の祭儀を捧げましょう」と参加者を祈りに誘いました。

毎年、説教は色々な神 父や、支援してくださっ ている信徒の方などにお 願いしているのですが、 今年は大阪大司教区司祭 の神田神父でした。神田 神父は、ご自分の阪神・

淡路大震災での体験を踏まえ、次のように参列者を 励ましてくださいました。

24年前の1995年1月17日(火)、阪神・淡路大震災の時、私は神戸市長田区の鷹取教会にいました。この町の3軒の家から火が出て、次々と家が燃え始め、教会まで火が来て全焼しました。私は、ただただ、なすすべもなく、ぼうぜんと火事を見ているだけでした。その後、町を建て直すために「まちづくり協議会」が立ち上がり、私は副会長にさせられたのですが、教会の隣に住んでいた人のことも知らなかったのです。火事の時、皆さんは、「〇〇さ~ん!」と助けようと必死で叫んでいたんですが、私は叫ぶこともできませんでした。それで、私は身

近な人を知っていこうと努めるようになりました。



震災前は、3つの壁がありました。「宗教」「国籍」「文化」の壁です。鷹取教会には、ベトナム人の信者がたくさんおられました。神戸の町には、その他、フィリピンとか、いろいろな国籍の人がおられました。その人々が震災を機に交流するようになりました。お互いに助け合うようになりました。震災によって、その壁がすっかり取り払われてしまいました。しかし、復興していくにつれ、その壁はまた徐々に建てられるようになっていったのは残念だと思います。しかし、交流することによって、国によってこんなに文化が違うんだ、ということが分かりました。国の違いだけではなく、この日本のいろいろな地域でも、文化や伝統が違います。そのいろいろな文化が交流することは恵みです。文化が交流するところには、新しい創造のわざが始まります。



東日本大震災の後、熊本でも大きな地震がありました。熊本、広島などでも、多くのボランティアさんが各地から集まり、文化交流が始まっています。 被災地は、今、過去を振り返り、元気を取り戻そうとしています。こうして、日本国中は、多文化エリアになろうとしています。多文化は新しい創造の始 まりです。私には、この文化交流によって、新しい 創造が始まり、教会も新しい教会になるだろうとい う予感があります。そして、仙台は、その発信地に なるでしょう。

私たちの復興の8年の歩みは、交流によって始まっています。新しい創造の歩みも始まっていることでしょう。阪神・淡路の歩みのなかで、地元の宗教者の交流が始まり、その中から生まれた「宣言文」が紹介され、説教は終わりました。

共同祈願と奉納は、ともに「チーム・カリタス仙塩」の方々が担い、亡くなられた人々や、被災者の方々、原発事故によってふるさとを離れた人、風評被害で苦しむ人、復興を目指して被災者のためにボ

ランティア活動をしている人々のため、心を込め祈り、奉献してくださいました。

震災から丸8年を迎えましたが、3.11の前後だけは、ニュースで取りあげられるものの、他の日には、忘れ去られてしまっています。その中にあっても、被災者の方はもちろん、神奈川県鎌倉市から、福島市から駆けつけて来てくださった方々、参加者の皆さんが、「今年もお目にかかることができました、ぜひ、来年もお会いしましょう」と声を掛けたり、「このミサに参加すると、力をいただけますね」という方もおられました。朝からの雨は、参加者の熱烈な祈りで、ミサが終わるころにはすっかり上がって皆さんを喜ばせました。 Sr.長谷川 昌子

「第6回いのちの光3・15フクシマ」を終えて

桜満開から葉桜へと世間の話題が足早に素通りしていくのを耳にして、改めて時間経過の早さに驚かされています。

「第6回いのちの光3・15フクシマ」の集いが、 3月15日(金)原町教会16日(土) (元寺) 路教会に、 行われました。

今年も、仙台教区の後援、日本カトリック正義と平和協議会・カトリック正義と平和仙台協議会の協賛をいただき、大変心強い思いでした。初日(15日)のミサは、平賀徹夫司教のもと、7人の神父たちと90人ほどの参加者で捧げられました。



光延一郎神父の説教は、原発事故後の国・東電の不誠実な対応を厳しく指摘し、廃炉に関わる諸問題(トリチウム汚染水の海洋放出案・放射能汚染土を高速道路に使用する案)など、環境汚染を無視した軽率な提案に対しても言及していました。

また、小高山同慶寺の田中徳雲住職から現地報告がありました。同慶寺は、福島第一原発から20km圏内

にあり、現在もご家族はいわき市に避難中とのことです。

住職は、いわき市から各地に散らばって住む檀家の 方々を訪問したり、時には小高のお寺で檀家の方々と 交流しながら、多忙な日々を送っているとい うことでした。



2日目(16日)の元寺小路教会における北川恵以子医師(小児科・精神科)の講演は、この8年間私たちが最も気にかけていた子どもを中心とした精神および身体被害についてのお話でした。

北川先生は、震災後月1回、札幌からボランティアとして通い、被災地の子どもたちの診療を行ってきました。ここ数年間は、南相馬市の診療所で、主に子どもたちの精神面での診療に当たってきました。福島県立医大が「小児甲状腺がん」は原発事故が要因とは考えにくいと発表したことについても、実際の数字は否定できないと話されました。また、ばらばらになった生活は、経済負担の厳しさ、家族の繋がりの崩壊を招いていることなどを丁寧に紹介していました。

廃炉まで数十年かかることを考えると、子どもたち



の健康被害につ いて、いったい 誰が責任を取る のかと怒りがわ き起こってきま す。

何よりも目の 前の子どもたち には(大人もで あるが)、一週 間でも二週間で

も現地を離れて過ごす「保養」がこれから当分の間、 必要なことと話されました。肝に銘じていかなければ ならないと改めて心に刻んだとこ ろです。

「いのちの光3・15フクシマ」実行委員会は、福島第一原発事故をきっかけにできたものです。チェルノブイリ原発事故がちょうど33年前の4月26日に起こったこと、そしてそこは今でも人が住むことを許されず、二世代、三世代の子どもたちが放射能による健康被害に苦しみながら過ごしていることを耳にするとき、「いのちの光」のなすべきことは、まだたくさんあることに気づきます。

爆発した原発の燃料デブリは、9年目にしてやっと 取り出せるめどがついたばかりです。世界の人々の目 は、そんなに甘くありません。日本が、私たちが原発 に対してどれだけ厳しい目を向けて対応していくかが 問われています。 勝治 美喜子(原町教会)

第2回 仙台司教区広報委員 • 地区広報委員総会

昨年に引き続き3月21日(木・祝)、仙台司教区の広報委員と地区広報委員が元寺小路教会に集まり、総会を開催しました。第1回総会で話し合われた内容を検証したほか、各地区の問題点や新たな提案も検討しました。主な内容を報告します。



○教区報に関して

読みやすくするため目次やリードをつけること。 カラー印刷化も提案されました。(教区のホームページでは、写真などはカラーで表示されています。) また、発行部数や配布方法について、各地区の現状に合わせて見直すことにしました。

〇内容に関して

四コマ漫画を取り入れて読みやすくする。各小教 区の歴史や特徴などを募集し連載、ホームページに も掲載する。信徒の高齢化に関連し、教区の取り組 みや信徒の準備なども特集することなども提案され ました。次号掲載内容についても検討しました。

〇英語版に関して

教区の信者数は、1万人を割っていますが、実際には信徒台帳に記載されていない外国籍信者は増えています。そこで、前号からは教区報の英語版も発

行。さらに充実した内容にするため、情報やニュー スの投稿募集を記載することにしました。

〇ホームページや SNS での対応について

教区のホームページは新しく教会を訪れようとする方にも大事なツールとなります。そこで、教区報に記事を掲載してもらうための投稿ページを作ったり、フェイスブックとも連動。スマートフォンにも対応できるかなどを検討しました。また、発行責任や管理体制などについても確認することにしました。〇その他

信者数が少ない小教区の場合、時間をかけてコミュニケーションをとり、情報を集めて原稿を依頼してきました。今後は広報委員と地区広報委員の情報を共有し連携を深め進めていきます。また教会に来ることができない信者に関して、広報委員としての対応も検討しました。

今回の総会では、教区報以外についても、さまざまな意見が交わされました。すぐに対応できる事もありますが、ここで話し合われた内容を少しでも教区の広報活動に活かしてまいります。

二コ神父による別れと祝福のメッセージ

仙台教区青年育成担当者として

皆さん、どうもありがとうございます! Thank you very much! Maraming Salamat, Po! Terima Kasih banyak! Cam on nhiều! Muchas Gracias! Muito Obrigado! Merci beaucoup!



私の祈りの生活の中心にあるのは、感謝の気持ちです。私が仙台司教区にいた過去6年間、特に青年育成担当者としての3年間を考えた場合、私はこれらの年月を通じて受けた途方もない祝福に感謝すること以外に何ができるでしょうか。また、ここ数週間で経験したジェットコースターのような目がくらむ感極まる感動を想像してみてください。恐怖、不安、興奮、疲労、圧倒的な愛と受容、加えて、私は多くの夕食に招待されました。したがって、体重は10キロも増えました。しかし、これらすべての感動の気持ちの真ん中にあるものは、深い感謝です。



私は青年育成担当者として 3年、そして、盛岡で過ごした 3年を思い出し、喜びと感謝でいっぱいです。若者たち、温厚な信徒の伝道師たち、シスターたち、司祭たち、教区の職員らと、一緒に楽しく奉仕することは、喜び、充実感、そして笑いに満ちていました。

教区の若者たちは、信仰と寛 大さをもってさまざまな方法

で、私を励ましてくれました。特に、「わたしは喜び のために歌う」聖歌隊グループで、開放的で楽しさに あふれたエネルギーを見せた彼らを見るとき、私は大 きな希望と励ましに満たされました。 今、私は明らかに去ることに、ためらいを感じています。しかし、自分が、この教会、教区で築いてきた関係の中で、神との関係における私自身の成長のために、どれほど助けていただいたかについて、心からとても感謝しています。

私の心は喜びと感謝に満ちています。私たちを喜び で満たしてくれるのは感謝であると信じています。

このメッセージを終わらせるにあたり、私は聖パウロのフィリピの信徒への手紙 1:3-6 と 9-11 を引用したいと思います。

「わたしはあなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それはあなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。」(1:3-6)

「わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。」(1:9-11)

地区制導入にまつわる思い

私は現在85歳、受洗したのは1958年、24歳のときでした。思えば戦後激動を続けた社会を背景に、約60年間、教会に関わってきました。

その間、献堂されたばかりの福島の小さな教会にカテキスタとして勤務した。日本語に堪能でなかったカナダ系の修道司祭を助けるべく働いた。当時は、ピアノ教室が併設されており、その子どもたちをはじめ、街の住民の出入りが多かった。夜にはカトリック要理に関心をもたれた若者がやってきて、私とともに学び、さらに彼らが日常直面する職場や学校の現実に向き合い、自由に意見を交わした。思い出すと非常に懐かしい。

その中から5~6人の人たちが受洗まで、こぎ着けた。主として、若いメンバーだっただけに、いつも楽しく活気ある談笑をした。

あれから、半世紀が過ぎ、今の教会にはそうした 姿は見えない。ひとしお、寂しく思う。

8年前の東日本大震災の被害をまともに受け、私たちの教会はやむなく解体の羽目になった。

聖堂を失った私たちは、町内の会館を借りて主日のミサをあげざるを得なかった。

震災から3年をへて、一部の信徒から「静かに祈ることのできる聖堂がほしい」という希望が出され、司教の配慮とあいまって、検討に検討を重ね、再建への思いが果たされた。もちろん、この機に及んで全国から過大な支援が寄せられ、私たちを勇気づけてくれた。今なお感謝のかぎりだ。



いを具現化したものである。

他方、従前から抱え持つ重要な課題が半端のまま取り残されていないか。例えば、司祭・神学生の召命にしても、その減少傾向には歯止めがかからない現状がある。当教区の神学生はたったの1人と伝えられている。この先、教会はどうなっていくのでし

ょう。その根底には、若い世代の教会離れが加速している現実を認めなければならない。幼児洗礼を受けても、やれ塾だの、やれ部活動だの、成長してゆくにつれて若者が教会から遠のいてゆく。当然、家族である私たち自身がしっかりと信仰をもたないからではないか。私たちが現代の価値観に流されてしまっているゆえんといえるように思われるが、どうでしょうか。

この4月の教区報において、司教は、仙台教区の信者数が1万人を割って、52教会で9,949人と報じられたことについて、大変ショックを受けられた、と素直な心境を伝えています。

このことは、何も仙台教区に限られたことではなくて、現在の教会並べてのすう勢であり、こうした 先細り傾向は避けがたいものと思われる。

私たちの教会は、ここ 10 年来、成人の受洗者はありません。この先、どう推移するのでしょうか。 懸念はつきることがない。

フランシスコ教皇は2017年の「世界召命祈願の日のメッセージ」で、「全ての信者は福音宣教者」と私たちに課せられている使命を強調された。このメッセージが私たちの心に深く、どう真摯に受け止められたのでしょうか。

どこの教会でも、信徒会の役員になり手がなく困っていると、よく聞く。総会を開いても、その大半はさっさと帰ってしまう。最近のPTAの状況とよく似ていると言えそうだ。

また、2012年8月のカトリック新聞紙上で、 故糸永真一司教(鹿児島教区)は、次のように書い ていた。すなわち「教会に来ている信者は5分の1 か、せいぜい4分の1でしかない。このまま、大 量の教会離れが進行し、明日の教会を担う青少年も いないなら、多くの小教区はやがて消滅する」と教 会の危機的状況に着目し小教区の改革への意欲を喚 起された。いずれこの指摘の通り現実となる日がや ってくるのかもしれない。

導入された地区制が今後安定的に維持されたとしても、各小教区にはいくつもの課題が目にとまる。

小教区間の相互支援。規模の大小を越えた積極的な情報の共有、人的・財政的な助け合いの構築、外国籍信徒との質的関係などの課題が頭をよぎる。難題ばかりだ。

11月には教皇が来日されるという。この機に私たち一人一人が、自らの信仰について自戒をこめて、問いなおしてみる必要があろう。宣教者としての意識を改めて誓いたいものだ。

清水 茂雄(須賀川教会) (写真は須賀川教会聖堂献堂式)

司 祭 紹 介

広報委員会は、神父を紹介するにあたって、次の4つの質問をしました。

- (1) 司祭になりたいと思った動機(きっかけ) はどのようなことですか?
- (2) 司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか?
- (3) 今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒へのよびかけ(希望)があれば、教えてください。
- (4) その他、神父を知るためのエピソードや、アピールなさりたいことなどなんでも。

アントニオ・ツゲル神父 (ベトレヘム外国宣教会)

はじめに

アントニオ・ツゲル神父は、ご高齢であり病気療養中でもあるため、自己紹介の文章を書き記すことができませんので、(A) インタビュー記事(伊藤宏子=志家教会)と(B)紹介記事(菅野耕毅=四ツ家教会)とにより、ご紹介いたします。

(A) インタビュー記事

今年の3月22日(金)に叙階60周年を迎え、6月15日(土)で88歳になられた神父を、仙台の特別養護老人ホーム暁星園に訪ねて、インタビューしました。

(1) 司祭になりたいと思った動機 (きっかけ) はどのようなことですか?

「私は、スイスで、1931年に四人兄弟の三男として生まれました。スイスでは、中学2年生の終わりに3年生に入るか決めねばなりませんでした。その時に偶然ベトレヘム外国宣教会の月刊誌を読むことができて『私の進む道じゃない



か』と、神さまから呼びかけられたように思いました。 両親に話したら、父がすぐベトレヘム会に手紙を書く ようにと言ってくれました。手紙を出したところ、ベトレヘム会の責任者が来て、いろいろ詳しいことを両 親に話し、その年の9月に小神学校に入ることになり ました。その前の3か月間は、特別講座に出てラテン 語を学びました。」

(2) 司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか?

「これからのことは申しかねます」

(3) 今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒への呼びかけ(希望)があれば、教えてください。

「①秘跡中心の信仰生活を大切に。②聖書中心の教育を大切に。みことばを行いにあらわすことができますように。③朝・晩の祈りと、食前・食後の祈りを大切に。そこに、信者であることがあらわれる。」

(4) その他、神父を知るためのエピソードや、アピール なさりたいこと。 (下記紹介記事を参照)

(B) 紹介記事

〇岩手県内の小教区担当司祭の勤務

ツゲル神父は、1960年11月に来日され、東京の

日本語学校で日本語習得の後、1962年6月に一関教会の助任司祭となり、1970年7月には盛岡上堂教会主任司祭に転任し、2001年3月まで勤められました。1995年7月からは花巻教会も兼任しておられましたが、2001年4月に盛岡地区が共同司牧となったことから花巻教会専任となられ、2009年4月には盛岡地区協力司祭に転任され、2016年10月まで勤務されました。

○盛岡地区の聖書研究会の指導

信仰生活における聖書の理解の重要性を確信され、 長年にわたり教会の聖書講座を毎週2~3回担当し、 また地域の家庭集会による聖書勉強会も担当するなど、 繰り返し聖書の勉強を継続することにより信仰生活を 深める指導を続けてこられました。あるときは、膨大 な「ベテル聖書研究」2年間の全課程を熱心に指導し て、二十数名の信徒に修了証書を授与されたこともあ りました(1977年6月)。

〇ベトレヘム会管区長・カトリックセンター長時代

ツゲル神父は、1977年4月にベトレヘム外国宣教会管区長に就任され、岩手県内の14教会の司牧活動を統括するとともに、翌年5月には新築された岩手カトリックセンターのセンター長も兼務し、一般市民に向け開かれた教会の活動を主導されるようになりました。その指導理念は「社会に開かれた教会」です。具体的には、次項(4)のような活動があります。

〇市民向け講座・展覧会・映画界などの活動

カトリックセンターの運営委員会の企画立案により 信徒の有職者に委嘱して組織的継続的な「市民講座」 を開設しました。また、司祭による「絵画展」「写真 展」や、有名カトリック作家や文化人の「講演会」、 マザーテレサなどの「映画」や「講演会」その他の文 化活動も展開しました。

〇「社会のなかの信徒」運動の展開

ツゲル神父の提唱により、組織でない運動体としての活動「社会のなかの信徒」運動が始められ、各方面より講師を招き、平和または人権問題の講演やイベントを行うようになりました。例えば、1980年11月「カンボジア難民写真展」、1981年2月「新しいカトリック社会観」の基本的な研究をする「社会のなかの信徒」講座(月1回で4か月)、1982年1月「弾圧下の『連帯』とポーランド市民を支援する集会」、1982年5月「光州事件」の映画上映およびミサ、1995年8月「戦後50年を迎える」平和講演会、

1996年7月には「現代社会とキリスト教」講演会など、さまざまな社会活動を展開しました。

〇家庭における信仰教育運動の展開

1979年の佐藤司教の年頭教書「子供達の幸せのために」に応えて、ツゲル神父は、岩手県内でも家庭における信仰教育のあり方を皆で考えてみようと呼びかけられ、同年3月に信仰教育の手引き作成委員会を発足させ、各教会で話し合い、その報告をもとに数年間にわたり研究協議を繰り返し、1985年3月に『家庭における信仰教育』を発行しました。これをもとにまた各教会で信仰教育の話し合いを深めました。好意的な書評を受け、全国の読者の求めにも応えました(初版2,000部、第2版1,000部、第3版1,000部)。

〇典礼奉仕者研修会の継続的開催

ツゲル神父は、カトリックセンターの新しい宣教司 牧の活動として、将来の司祭不在の場合の典礼も視野 に入れ、1983年1月、典礼奉仕者研修会を企画され、 県内の各司祭に交代で典礼の得意分野の講話を担当さ せて、研修を積み重ねることになりました。 県内 14 教会の典礼を担当する信徒たちを招集して毎年 1~2 回の研修会を企画し、2002年まで、24回にわたり 継続して実施しました。その内容は聖体奉仕を含む典 礼の全ての分野に及ぶ充実した内容でした。

ジャン・シャール・ロワゼル神父

(ケベック外国宣教会)

はじめに

ワゼル神父には、教区 広報委員会のクレアが、 インタビューしました。 以下、そのインタビュー によってまとめます。



ロワゼル神父は約

60 年間日本での宣教活動に関わってきました。その間、約50 年間日本のボーイスカウトに貢献し、また仙台司教区では14 年間過ごしました。そして、今年85 歳を迎えられます。神父の60年にわたる宣教活動について全てを、お聞きすることはできません。しかし、この短いインタビューの中から宣教師としての彼の偉大さを垣間見ることができました。

召命物語

私の召命物語は、聖パウロの召命のように特別なものではありませんでした。

私は、宣教司祭になる以外、私にとって他の道はないと思いました。それはまさに、神の、聖霊からの呼びかけであると感じました。しかし、思い出してみると、私にとって、ミュージシャンになるか、司祭になるかどちらを選択するかの岐路がありました。私は音楽が大好きで、同時に司祭になることも私の唯一の生き方でした。そして、ホンジュラスから来たケベック外国宣教会の宣教師がいました。彼は、私も彼らの中のひとりになりたいという思いを奪い立たせてくれま

した。彼は、ホンジュラスの貧しい地域の人々、特に 辺境の人々のために献身していましたが、自分の宣教 師としての人生を幸せに過ごしていました。私は彼と 同じくらい幸せになりたいと思いました。それで、神 学校に入りました。

将来の計画について

私は今年の11月に85歳になります。私は、将来のための壮大な計画を持つようなタイプではありません。日々同じように毎日を暮らしています。すべて神にお任せしています。しかし、はっきりしている一つのことは、ケベックに帰国することです。そして、祈りの生活、ガーデニング、音楽鑑賞などを続けるでしょう。

音楽とガーデニングは、私に活気をあたえ、私は長年、宣教師生活を続けることができました。これから もそのように続けていくでしょう。

仙台教区と教会への希望

私は、教会の中で信徒がもっと権限をもつことを希望します。一般信徒は、教会の中で、ただ、聖職者に従うばかりでなく、もっと積極的な参加、役割、責任が与えられなければなりません。教会にはより有能で、機会を与えられれば、惜しみなく喜んでその才能を分かち合える信徒がたくさんいます。私は教会が聖職者のためだけではなく、信徒のためでもあると信じています。

教会における聖職者の役割は、聖書の中のバルナバ のようなものなのです。すなわち、神の心を持って神 のみことばを伝え説く人々を養成することなのです。

この目的を実現するためには、司祭は誠実さを持って生きなければなりません。教区信徒たちの現実に身を置き、信徒たちの現状を理解するために、彼らと関わりを持たなければなりません、そして、彼らと共に生きることです。

信徒たちは、教会とは、一つの大きな家族であり、 共同体であることそして神の国の建設のために、一人 一人が役割と責任があることを自覚しながら、意識を 変えていこうとしなければなりません。 司祭と教区信 徒の間に協力がなければなりません。 これが難しいこ とを、私は知っています。 そして、それは時間がかか ることも知っています。 しかし、いつかそれが起こる ことを私は希望し、祈っています。

フェリックス・ロボ神父 (神言会 S.V.D.)

私の召命の源

司祭としての召命の 源は私の家族です。私は 主の愛で私を養った宗 教的な家庭で生まれ育 ちました。私たちは毎日 祈ります。私の祖父母は いつも私が善良であり、



そして他人に親切にすることを勧めました。私は4人

の叔父、2人の叔母と了人のいとこがいて、それぞれ別の修道会で修道生活をしています。私は若い頃、私の教区司祭がミサを捧げる様子に魅了されました。私の家族、親戚、そして私の教区の司祭たちが、私に司祭としての生き方を受け入れるように促しました。私が神言会の司祭で、当時の召命促進担当者であったバーナード・ロドリゲス神父に初めて会ったとき、私は大学進学準備学校で勉強をしていました。私が彼に会ったとき、私は司祭として奉仕したいという強い願望がわき、神言会に加わることにひかれていきました。それ以来、私の人生で最悪の危機においても、神はいつも私のそばにいました。そうです!こうして私は神のぶどう園で神のみ言葉の司祭になったのです。今なお、私に対する神の大きな愛に私は感謝でいっぱいです。

仙台教区への貢献

神言会の私たちの上長から、私は仙台教区の人々に 奉仕するという使命が与えられました。神の言葉によ る宣教師としての私の最大の義務は、人々に「良いた より」を宣べ伝えることです。私は、これらの仙台教 区の人々を神の方へ導きたいという願いをもって、 人々に手を差し伸べるために私の神からの贈り物を与えます。私は、仙台教区にいる限り喜んで神にお仕え します。

仙台教区の信徒皆さんへ望むこと

人々が神にもっと近づき、神の真の弟子になることを願っています。もっと神と過ごして神の本当の愛を体験すれば、私たちの教会を本当の祈りの家にすることができます。これを通して、私たちは、社会の中で主とそして他の人々とつながります。そして、このことによって、私たちの世界をもっと住み易い場所にすることができるでしょう。

私の深い感謝

私は愛されており、神言会(SVD)の司祭になるように選ばれたことをうれしく思います。私は、あなた方の祈りを通して私の召命と使徒職を支えてくださるように、心からお願いしたいと思います。私の司祭生活にとってそれは祝福となるでしょう。もう一度言いますが、私は命を与えて無条件に愛してくださる神に感謝します。神が、私たち皆を祝福してくださいますように・・・・

平和旬間講演会のご案内

~ 平和を願い 神さまからいただいた いのちの大切さに向き合う ~

講師 ウエイン・バーント司教(那覇教区)

私たちの生きるこの世界ではさまざまな問題があふれています。東日本大震災後の被災地が抱える原発の問題や人々の分断、沖縄の人々の苦しみ、自然環境の破壊、さまざまな人権の問題、憲法9条を取り巻く国内外の環境の変化により日本の平和も揺らいでいます。信仰を通してそれぞれが抱く平和への思いについて共に考えてみませんか。今年はウエイン・バーント司教をお招きいたします。平和を願いイエスにならう生き方を求めて私たち一人一人、一つ一つのいのちとの向き合い方を学びたいと思います。ぜひご参加ください。(参加費無料)

○と き

2019年8月12日(月)15時~(14時 開場)

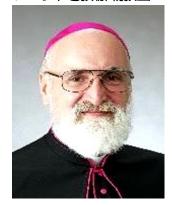
○ところ

元寺小路教会大聖堂 (講演終了後ミサを予定しています)

問い合わせ先

カトリック正義と平和仙台協議会 仙台市青葉区本町1-2-12 カトリック元寺小路教会内

Te1:090-2022-4007(木元) E-Mail: sendai seihei@yahoo.co.jp



カプチン・フランシスコ修道会 1954年5月13日生まれ 1983年米国で司祭に叙階 2017年12月9日那覇教区司教 に任命される。 2018年2月12日司教に叙階

編集後記

今回は、予定していた記事が集まらず、苦戦しました。どうにか、完成してホッとしています。仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は、随時受け付けますので、下記のメールあてに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。 (上野 隆)

sendaikyoukuho@gmail.com 次号発行予定日 12月1日(日) 原稿締め切り 9末日